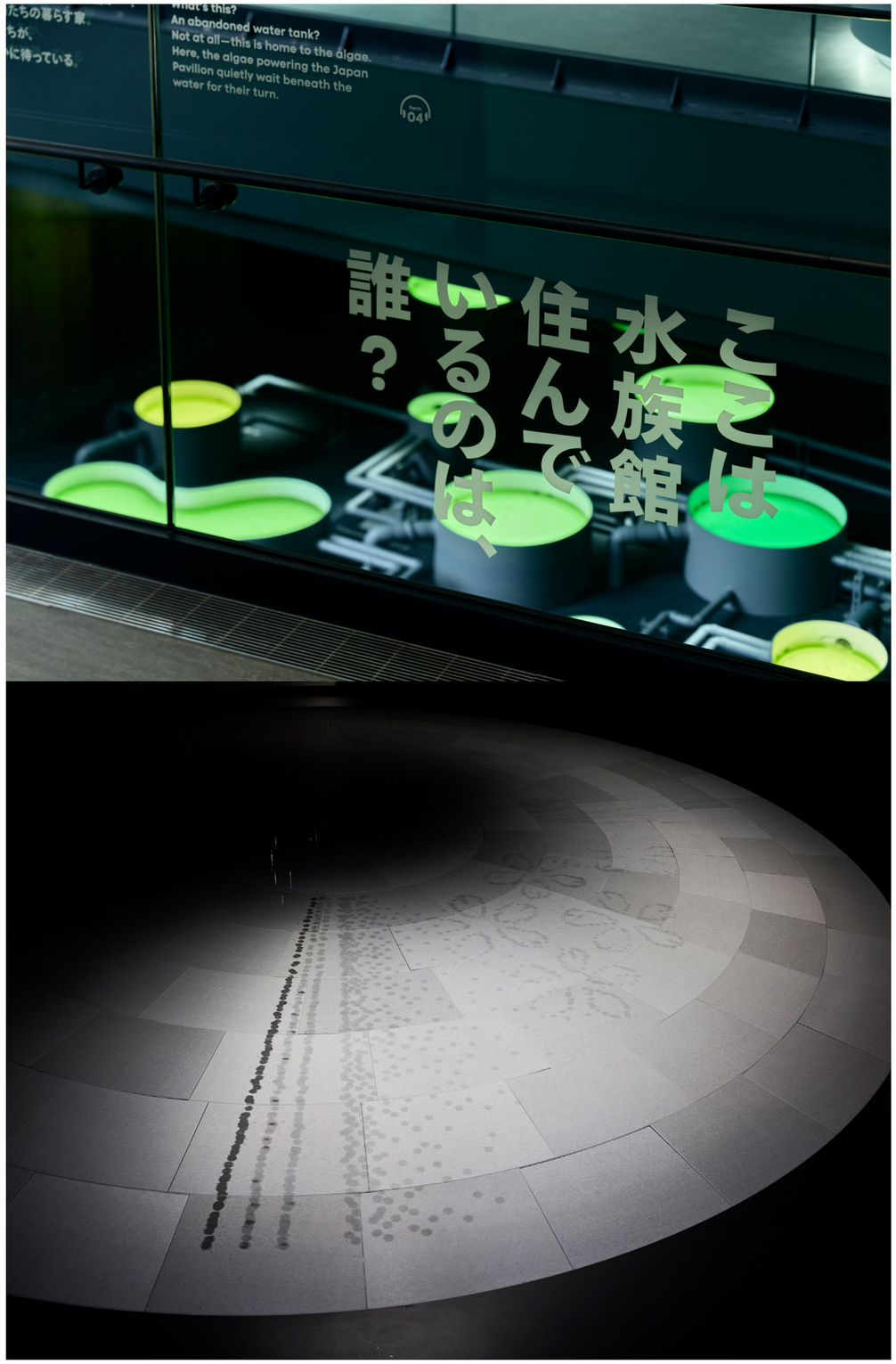
Legacy Book

日本館 レガシーブック

Japan pavilion
Expo 2025

いのちと、いのちの、あいだに

日本館は、他者と自分、人と人以外、生物と非生物など、さまざまないのちといのちの「あいだ」（境界・差異・関係性）を見つめることで、いのちの尊さや、互いに支え合う存在であることを実感してもらうため、さまざまな取り組みを行いました。社会課題を「自分ごと」として捉え直す新たな視点に、さらには未来社会の作り手として動き出すための変化の始点にしてもらいたい。日本館のテーマ「いのちと、いのちの、あいだに」には、未来へのそんな思いが込められています。



はじまりも終わりも存在しない「循環」を表す円環状の構造を持つ日本館。展示空間を構成するPlant・Farm・Factoryの3つのエリアでは、「ごみ」から「水」へ、「水」から「素材」へ、そして「素材」から「もの」へと、いのちが形を変えながらめぐっていく様子を、来館者は目の当たりにします。館内をぐるりと一周することで、文字通り「循環」を体感できる設計としました。さらに、実際に万博会場内で回収した生ごみをエネルギーへと再生するリアルな「循環」も実践しました。

日本館では、いのちそのものに立ち返り、自らの周辺にあるさまざまな「循環」に気づく機会を提供し、世代や国籍を問わず、すべての来館者に未来社会へのアクションを促しました。さらに、日本館の体験を経た人々、とりわけ子どもや若者をはじめとする「万博チルドレン」が、「いのち輝く未来社会のデザイン」をリードしていくきっかけとなることを目指しました。

Legacy Book

日本館レガシーブック

本書は、大阪・関西万博 日本館のさまざまな取り組みや活動を通じて、日本館体験者に届けてきた多様な価値・気づき・行動変容などをまとめたものです。展示やイベント、その背景にある思いやねらいを振り返りながら、日本館が何を問い、何を遺そうとしたのかを記録しています。循環型社会の実現に向けたアクションを考えるための資料となるように構成しています。

目次

Introduction **日本館とは** 02

はじめに 10

日本館レガシー 12

Section 01 **循環を自分ごと化する** 14

Section 02 **「おわり」を問い直す** 22

Section 03 **微生物の力を実感する** 28

Section 04 **ものづくりの発想を広げる** 34

新たに生まれたつながり 40

アクセスできるレガシー 41

おわりに 42

Extra **Photo Gallery** 45

小さな「?」から、
未来を照らす道標を

2025年日本国際博覧会（以下、大阪・関西万博）のテーマに対し、日本館がホスト国として掲げたテーマは「いのちと、いのちの、あいだに」です。これは、人間に限らず、動物、植物、さらには無機物なども含めたあらゆるものの連鎖を指し、それらが次へとつながっていく大きな「循環」へのアプローチです。この思想の根底には、古来より日本人が持つ自然観や、「儚さ」「季節の移ろい」といった独自の美意識の再発見があり、未来を生きるヒントを過去から探求するという視座があります。

この壮大なテーマを具現化するため、私たちは常に「展示体験」を最優先としました。建築、展示、コミュニケーションをすべて連動しながら同時に進行させるという難度の高い手法を採用し、ハードとソフトが一体となった空間の創造を目指したのです。大きな声で注目を集めるのではなく、あえて小さな声で「ささやく」ようにメッセージを丁寧に積み重ねる。来館者の方々に未来への「答え」を提供するのではなく、さまざまな「ヒント」や「きっかけ」に気づいてもらえるようにする。その結果、日本館はじっくりと噛みしめるほどあたらしい気づきに出会える多層的な空間になりました。

個人的には、ハードとしての日本館はすべて消えて無くなるからこそ意味があると考えています。このパビリオンは半年という時間軸を意識してデザインされたもの。無理に残すことは、不自然なことであり、日本館のテーマの根底にある「循環」と相反することのように感じます。有形の価値が残らないからこそ、無形の価値が人々の中で曖昧な形として残り、息づき続けていく。そして、姿形を変えながら継承されることで、本当の意味での「循環」が実現するのではないでしょうか。

日本館での体験を通じて、考えや行動の大きな変化に無理につなげる必要はありません。一人ひとりが日本館から持ち帰った小さな「?」を大切に育み、それぞれの「答え」に辿り着く。これまで漠然と感じてきた「当たり前」という感覚が僅かでも揺らぎ、アップデートしてもらえたら、この上なくうれしく思います。その一人ひとりの気づきや答えが、未来社会を明るく照らす道標となることを願っています。

佐藤オオキ
大阪・関西万博 日本館
総合プロデューサー／総合デザイナー

©Allan Abani

日本館レガシー

日本館レガシーとは、“いのち”と“いのち”の「あいだ」を見つめる体験を通じ、そこから生まれる循環型社会の実現などに向けた多様な価値・気づき・行動変容を指します。それは、さまざまな“いのち”の尊さや、互いに支え合う存在であることに気づき、共創しながら大きな循環を生み出していくためのあらゆるアクションです。日本館レガシーは、有形・無形を問いません。会期前から会期後に至る一連の日本館の活動や体験を通じて変容した個人の意識や行動、さらには今後実現される社会的価値観のアップデートへとつながるポジティブな影響も含みます。

4つのセクション

日本館レガシーは4つのセクションで構成されます。1つは、日本館の体験全体に通底する「循環」という大きなテーマに沿ったもの。残る3つは、日本館を構成する3つのエリアでそれぞれ訴えるテーマに沿っています。続くページでは、各セクションにおける取り組みと成果を紹介していきます。

SECTION 01 循環を自分ごと化する

食べる、使う、捨てる。私たちの日々の行動が、地球という大きな循環に影響を与えることを自覚し、未来社会の実現に向けたアクションを促していきます。

キーワード：

気づく　体感する　参加する　共生する　未来を共創する

SECTION 02 「おわり」を問い直す

ごみは本当に「おわり」なのだろうか。当たり前としてきた「捨てる」という行為を問い直すことは、次のはじまりを考えることでもあります。

キーワード：

再生　資源　発酵　菌　バイオガスプラント　はかなさを愛でる　移ろい

SECTION 03 微生物の力を実感する

目には見えない。けれど、確実にいのちのめぐりを支えている。その小さな存在がもたらす大きな力を目の当たりにし、循環の世界を深く感じ取ります。

キーワード：

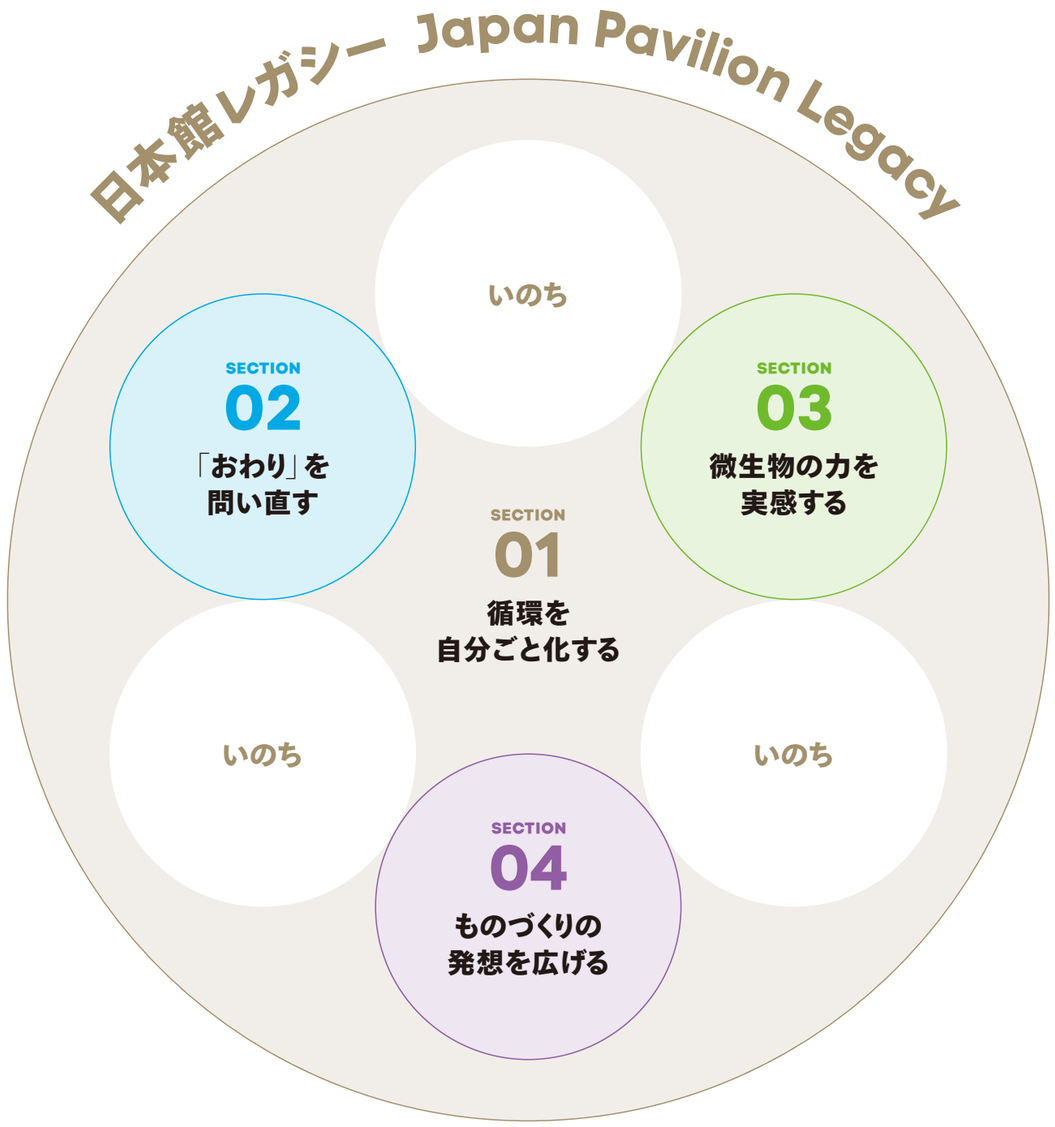
藻類　微生物　見えないいのち　分解する　水素酸化細菌　バイオものづくり　いのちをつなぐ

SECTION 04 ものづくりの発想を広げる

こわれたら直しやすく、使い終わったら次のいのちに活かせるように。循環を前提とした日本古来の柔軟な発想から、未来のものづくりの糸口をつかみます。

キーワード：

やわらか　もったいない　常若　日本古来の文化　CLT　スツール　継承する　次につなげる



日本館レガシーの概念図

“いのち”と“いのち”の「あいだ」をつなぐように、〈「おわり」を問い直す〉〈微生物の力を実感する〉〈ものづくりの発想を広げる〉という3つが存在し、全体を包括するように〈循環を自分ごと化する〉という大きなアクションがあります。

開幕前から「循環」の価値を発信し続けた〈Web広報戦略〉

気づく

日本館のテーマ理解と来館意欲の双方を高めるために、開幕の2年前から閉幕日まで積極的にオンラインメディアでの広報活動を展開しました。日本館Webサイトでは日本館のコンセプトやテーマ、展示内容への理解を深めるコンテンツを公開。公式SNS（X・Instagram・Facebook）では会期中にイベント情報や現地の様子をリアルタイムで発信。また、日本館の世界をのぞける〈グリーティングムービー〉や展示への疑問に答える10本の〈ガイドムービー〉など動画も公開。メディア特性に応じたコミュニケーションを展開しながら、日本館の認知拡大と興味喚起を図りました。日本古来の発想に由来する「循環」の価値をさまざまな形に翻訳しながら、一貫して丁寧に表現し続けました。2025年10月末時点の総フォロワー数は50,096名に達し、多くの人々へ日本館の魅力を届けました。

難しいを楽しいに変えて「循環」への興味を高めた、日本館公式Webマガジン〈月刊日本館〉

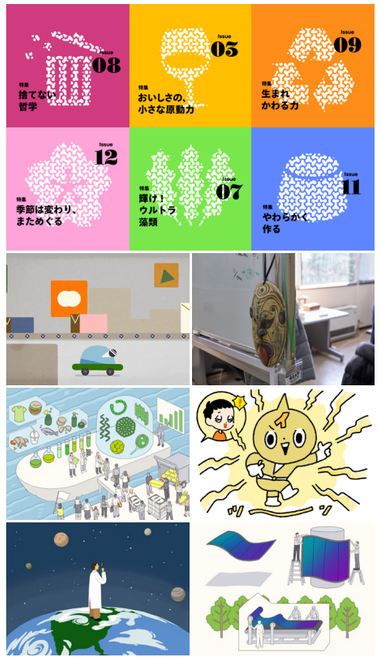
気づく

日本館の「循環」への関心を高め、その魅力を広く伝えるために、開幕の1年前から公式Webマガジン〈月刊日本館〉を全12回にわたって公開しました。「循環」再ハッケン！をテーマに、いのちの循環や微生物の働き、藻類の可能性、ごみの本質、日本の美意識など、専門家による多彩な記事を写真やイラストを多用しながら親しみやすい表現で紹介。毎号さまざまな切り口で循環にまつわるあたらしい視点を発信しました。SNSでは「月刊日本館が良い学びになった」「予習になって楽しかった」と記事を共有する投稿も。閉幕後の2025年10月末時点で総PV数は264,805を記録し、閲覧者の82%が「循環」への興味が高まったと回答※。多くの人が循環に目を向けるきっかけとなりました。現在は、経済産業省と日本国際博覧会協会のWebサイトでアーカイブ版をご覧いただけます。

※来館者の意識・行動変容評価アンケートの回答者402名のうち、月刊日本館を見たと回答した162名より算出

経済産業省：
大阪・関西万博
日本館について

日本国際博覧会協会：
EXPO 2025 大阪・関西万博
日本館Webサイト「月刊日本館」



日本館について自発的な学びを促進した〈まるごとガイド〉

気づく

日本館の展示や関連する知識を自発的に学べるように、Webコンテンツ〈日本館まるごとガイド〉を公開しました。来館の予習・復習となる展示解説はもちろん、その背景となる社会課題、日本の文化や美意識とのつながり、展示を支える最新技術、展示内容にまつわる豆知識などの情報を掲載。多角的な視点から日本館についての理解を促進し、オンライン上でも学びを深められる環境を整えました。公開以来、合計235,057PVを記録（2025年10月末時点）し、閲覧者の89%が展示の理解度が高まったと回答※。現在は、経済産業省および日本国際博覧会協会のWebサイトでアーカイブ版として公開しています。

※来館者の意識・行動変容評価アンケートの回答者402名のうち、まるごとガイドを見たと回答した217名より算出

経済産業省：
大阪・関西万博
日本館について

日本国際博覧会協会：
EXPO 2025 大阪・関西万博
日本館Webサイト「まるごとガイド」（pdf）

ゲーム感覚で「循環」の当事者になれる〈バーチャル日本館〉

実感する

来館前も来館後も、さらには来館できない方も、日本館のコンセプトをより深く体感できるように、いつでもどこからでもアクセス可能な〈バーチャル日本館〉をオープン。バーチャル空間ならではの体験価値を重視し、プレーヤー自身がごみとなって分解されたり、藻類となってCO_2や光を集めたり、いのちといのちをつなぐ「循環」の一員となれる空間を構築。身近な暮らしの中に存在する循環を実感するきっかけとなり、さらに、リアルとデジタルが相互に補完し合うことで、日本館での体験に広がりを持たせました。

利用者の声

●万博の再現度の高さに驚いたのと同時に、日本館のテーマである循環の本質的な理解につながった（20代）●想像以上に多くの表現で、情報を分かりやすく自分ごととして捉えることができた（20代）●ごみや藻になって、循環を体験することはバーチャルならでは。ミニゲーム感覚で楽しみながら学ぶことができた（20代）●自分がごみの立場になるという視点の転換を通して、自分も循環の一員だと具体的に考えるきっかけになった（20代）

あたらしい視点が広がる日本館の展示体験

気づく　実感する

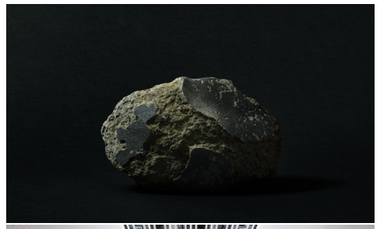
普段、あまり意識しない“いのち”と“いのち”の「あいだ」に目を向けることで、それぞれのいのちの尊さや互いが支え合っている存在であることを自覚し、身近な「循環」を感じてもらう。そんな展示体験を届けるために、「ごみ」から「水」へ、「水」から「素材」へ、「素材」から「もの」へ、という3つのエリアで構成し、館内をぐるりと一周すると、新たな気づきや発見につながる展示としました。来館者からは「循環は自分のそばにあるのに、それに気づくための知識や視点がなかった。あたらしい発見がたくさんあった」といった声が寄せられ、アンケートでは98%が展示物が良かったと回答※。「循環」をより身近に感じられる体験を来館者に届けました。

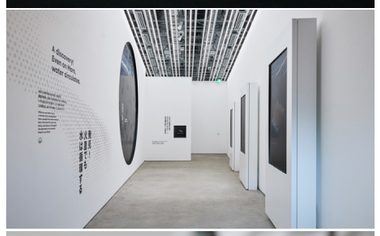
※来館者アンケートの回答者1,033名より算出

循環への関心と視野を広げた〈火星の石〉と〈「火星の石」観覧証明書〉

実感する

火星にも水が存在する可能性を示唆し、地球だけでなく宇宙規模でのいのちの循環にも目を向けるきっかけを生みだした、世界最大級の〈火星の石〉。万博の開幕前から閉幕までに数多くのメディアにも取り上げられ、日本館を象徴するアイコン的存在となりました。2025年7月13日からは来館者に〈火星の石〉の観覧記念として固有の番号つきの〈「火星の石」観覧証明書〉を発行し、累計約100万枚を配布。来館者からは「存在そのものに特別感を感じた」「火星にも水があったことに驚いた」などの声があがり、日本館の認知拡大とテーマ理解の深化に大きく貢献しました。





来館者を「循環」の世界へと深く導く〈アテンダント〉

実感する　行動する

「一人ひとりが日本館」というキャッチコピーを掲げて、開幕から閉幕まで184日間で265名のアテンダントが勤務しました。アテンダントは来館者に対して発見や気づきを促す役割を担いました。案内や展示説明に加えて、アテンダント同士で来館者からの質問内容や対応事例などを積極的に共有。来館者へのコミュニケーションを改善し続け、日本館で過ごす時間を快適で学びのあるものへとつなげていきました。また、アテンダント自身も展示に触れることで「私生活の中にも『循環』はあると気づけた」「今後も自分の周りの人に広めていきたい」などの意識の変化が生まれ、かれら自身が日本館の理念を体現する存在へ。来館者の98%がアテンダントの対応を高く評価し※、「展示内容の質問をすると丁寧に説明してもらえて、理解が深まった」といった声もありました。

※来館者アンケートの回答者1,033名より算出

気づきを促し、理解を深める日本館の〈言葉〉

実感する

“これであなたも、「循環」の一部ですね”、“「さよなら」じゃなく、「いつかまた」”。日本館では来館者に情報を感じてもらう空間を目指し、思考をそっと揺さぶる言葉を館内の壁面に浮遊するように配置しました。印象的な言葉を撮影する来館者も多く、SNSでは「日本館の言葉がとても好きで、もう一度来館したい」「思わず泣きそうになった」といった投稿も。また、展示の背景や意図を丁寧に伝えるために、音声ガイドも導入。開幕から閉幕までの合計再生回数は213,958回を記録し、利用者の92%が展示の理解度が高まったと回答※しました。「循環」に興味を持ってもらえるメッセージや、理解を促進する音声を組み合わせることで、体験価値を向上し、気づきを促しました。

※来館者の意識・行動変容評価アンケートの回答者402名のうち、音声ガイド利用者125名より算出

子どもへの展示理解を促進する〈予習ツアー〉

気づく

子どもたちに、日本館をもっと楽しんでもらいたい。その思いから、入館前にアテンダントが日本館のコンセプトや展示背景などについて解説を行う〈予習ツアー〉を、会期中に新たに導入しました。そもそも「循環」とは何か、日本館はどんなパビリオンなのか、建築や展示にまつわる知識など、知っていると展示体験がもっと豊かになる情報を紹介。未来を担う子どもたちが、日本館での学びや体験を自分ごととして捉えるきっかけを作りました。各回の定員は10名程度。閉幕までに延べ6,725名が参加しました。

参加者の声

●循環というテーマがしっかりと表現されていることが子どもにも伝わった（40代）●説明を聞いてから観覧したので、子どもも展示について深く理解できたと思う（40代）●最初から再利用が前提というCLTが印象的だった（10代）●クイズ用紙をいただいたので、子どもと答えを探しながら理解を深めることができた（40代）●子どもたちは大人になっても、今日の体験を覚えていると思う（40代）

来館者が自ら考え、自分の言葉で伝える〈Voices きかせて、日本館〉

行動する

来館者が日本館を観覧して感じたことを、自らの言葉として発信する〈Voices きかせて、日本館〉を公開しました。「どの展示が一番好きだったのか」「どんな発見や気づきがあったのか」「あなたにとって身近な『循環』とは」などのインタビューを実施し、展示体験で得た気づきや発見をそれぞれの視点で言語化。日本館Webサイトや公式SNSで発信することでより多くの方に日本館への興味喚起を図るとともに、来館者自身が日本館の体験価値を広く伝えるという取り組みとなりました。

インタビューの声

●人やもののつながりは大事にしていきたいし、未来にも残していきたい（30代）●やわらかなものづくりという発想は目から鱗だった（20代）●服が破れても捨てるんじゃなくて、どう直すか。またあたらしいものに生まれ変わるように考えている（50代）●循環って、自分も参加できるものだと意識が変わった（10代）●発見と驚きの連続で、気がついたら3時間近くいた（40代）●子どもに何か教えることは循環だなと気づいた（40代）●日本館の展示を見て、人類というレベルで人って循環しているだと気づいた（40代）●すべてがつながっていることが分かって、無駄はないと理解できた（50代）

〈宇宙規模のいのちのつながり〉から「循環」への興味喚起を図るトークイベント

実感する　行動する

日本館では、会期中に「循環」と展示に関連したコンテンツを組み合わせたイベントを継続的に実施しました。〈日本館トークイベント～宇宙・循環・つながるいのち～〉もその中のひとつです。宇宙飛行士の山崎直子さんなどを登壇者※に迎え、計288名の来場者とともに、宇宙ステーションでの貴重な水の再利用や、宇宙と循環のつながりについて学びを深めました。宇宙から地球のいのちへと続く壮大な循環に触れることで、循環型社会への関心を高める場となりました。

※登壇者：宇宙飛行士 山崎直子さん、国立極地研究所　南極隕石ラボラトリー 責任者 山口亮さん、JAXA 宇宙科学研究所 グループ長 臼井寛裕さん、東京科学大学 地球生命研究所 所長 関根康人さん、内閣府官房審議官（経済財政運営担当）浦上健一朗さん

参加者の声

●循環なくして生きられないという話から、人間はつながりが重要（10代）●宇宙ステーション内で取り組んでいる循環について勉強してみたい（10代）●水や資源を大切に使わないといけないと感じた（20代）●ごみの捨て方や余計なものは買わないなど、いままで以上に意識していきたい（20代）●地球が特別な存在ではなくて、ほかの星も同じなのかもしれないし、生命は循環していると思った（10代）●私たちは宇宙規模で循環しているという話が印象的だった。宇宙を知ることは、地球を知ること。宇宙と地球ってつながっていると感じた（10代）

大学生が「循環」を体験・実践・伝達する〈日本館レガシープロジェクト〉

行動する

〈日本館レガシープロジェクト〉は、循環型社会を担う若者に向けて「循環を自分ごととして捉え、実際に行動へとつなげてほしい」という日本館の思いを継承することを目的に実施した取り組みです。約50名の大学生がプロジェクトメンバーとして参加し、テーマごとにチームを編成。日本館で得た学びをもとに、対話と共創を重ねながら循環型社会について自分ごととして捉えました。最終的に4つの中学校を対象に、オンライン授業形式で学んだ内容をレクチャー。展示体験から得た新たな価値観や気づきを次世代へとつなげました。プロジェクトの詳細は、経済産業省と日本国際博覧会協会のWebサイトにレポートとして公開しています。

参加大学生の声

●使い終えたものは、その後どのような未来があるのか、考えるようになった　●小さな工夫の積み重ねが持続可能な社会作りつながることに気づいた　●私たちは循環型社会の一員であり、一人ひとりの行動の積み重ねでより良い社会が作れると意識が変化した

中学生の声

●ごみに対する考え方が変わった　●もっと循環について調べてみたいし、実際にやってみたい　●学校の中にも循環があることが分かった　●テーマについてしっかり考えられる時間になった　●授業を受けただけで終わらず、日常生活に活かしていきたい

経済産業省：
大阪・関西万博
日本館について

日本国際博覧会協会：EXPO 2025 大阪・関西万博日本館Webサイト「日本館レガシープロジェクトレポート」（pdf）

SECTION 02

「おわり」を問い直す

Plantエリアでは、「おわり」の象徴である「ごみ」を起点に、そこから生まれるあたらしい価値を提示し、「おわり」の捉え方を問い直すことを目指しました。生ごみがエネルギーへと生まれ変わるプロセスを体感する展示をはじめ、身近な暮らしの中で「おわり」を「おわり」にしない行動へと意識を変える多彩な施策を展開しました。

〈日本館体験を通じて目指した変化〉

気づく

おわりの「多様性」に気づく

- ごみは「おわり」ではなく、次のいのちの「はじまり」であることを知る
- ごみを捨てる前に、ごみにしないための工夫を学ぶ

↓

実感する

おわりの「その先」を想像する

- 日常生活でのごみの扱い方や捨て方を意識的に見直す
- 捨てたごみが循環の一部となって社会をめぐっていくことを考える

↓

行動する

おわらせない「工夫」を実践する

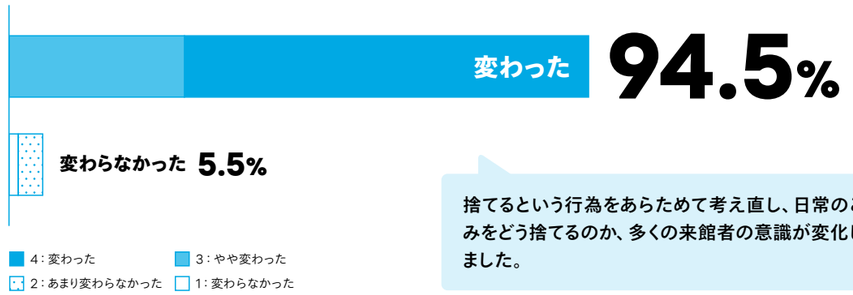
- 身近な暮らしで出るごみを減らしたり、リサイクルしたりするなど、実際に資源として活かす
- 自らの行動や工夫を他者と共有し、「おわり」を問い直す視点を広げる

日本館が受け入れた生ごみの量

約89,000kg ※1

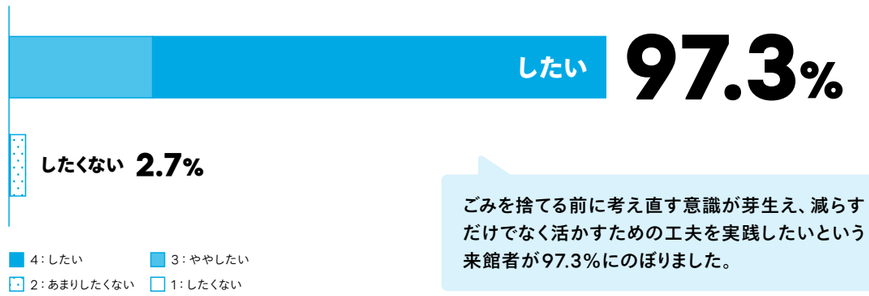
会期中、日本館では万博会場で捨てられた約89トンの生ごみを受け入れ、日本館のバイオガスプラントでエネルギーとして再生・活用しました。この生ごみ量は一般家庭の約477年分の生ごみ※2に相当します。

Q. ごみを捨てるときの意識が変わりましたか？※3



捨てるという行為をあらためて考え直し、日常のごみをどう捨てるのか、多くの来館者の意識が変化しました。

Q. ごみを減らす、またはごみを活かす工夫をしたいですか？※3



ごみを捨てる前に考え直す意識が芽生え、減らすだけでなく活かすための工夫を実践したいという来館者が97.3%にのぼりました。

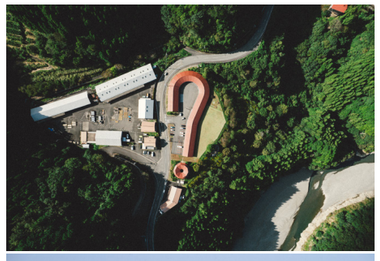
※1 生ごみに混ざったプラスチックや小金属類など、バイオガスプラントでの再生に不適合なごみも一部含む受け入れ総量 ※2 環境省「一般廃棄物の排出及び処理状況等（令和5年度）について」「容器包装廃棄物の使用・排出実態調査の概要（令和5年度）」より算出。1人が1年に排出する生ごみの重さを46.6kg、1家庭を4人として計算 ※3 日本館の来館者402名に対して行った意識・行動変容アンケートを集計。最高評価の「4」から、最低評価の「1」を等分し、その中で最も当てはまるものを選択する回答方式。数値は小数第二位以下を四捨五入して表記しているため、合計が100%とならない場合があります

Web、SNS、予習コンテンツ

「ごみ」という概念を問い直す〈月刊日本館〉

気づく

ごみや排泄物（はいせつぶつ）は、本当にものの「おわり」なのでしょうか。月刊日本館では「ごみ」を切り口にした特集を展開しました。2号「おわりは、はじまり」と8号「捨てない哲学」では、多角的に「ごみ」を問い直す記事を掲載。自分にとってはごみでも、他者にとっては価値があるものが存在することに焦点を当て、ごみとそうではないものの境界線について、問いを投げかけました。こうした連続的な発信を通じて、日常の行動を見直すきっかけを生み、「おわり」に対する新たな視点や価値観を届けました。



日本館メンバーも「ごみ」について学ぶ

行動する

日本館では、「ごみ」や「おわり」の価値観を一方的に伝えるのではなく、メンバー自身が学び続ける姿勢を大切にするからこそ、その価値観をより深く届けられると考えました。月刊日本館８号では、日本館の言葉とデザインを担当した渡辺潤平さんと色部義昭さんが上勝町ゼロ・ウェイストセンター “WHY” を訪れ、現場で得た知見を発信。アテンダントに対しては会期前に20日間の研修の中でレクチャーを実施し、会期中もスタッフエリアに解説パネルを設置するなど、学びを継続的に更新できる環境を創出。来館者だけではなく、日本館に関わる全員がともに学び合う場として運営しました。

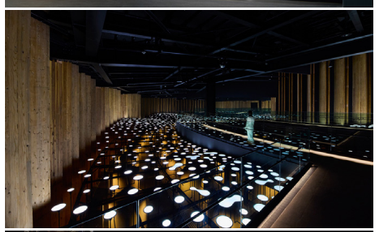
展示、体験

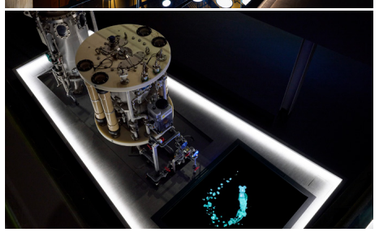
「ごみ」の再生そのものを展示体験に昇華

気づく　実感する

ものごとの「おわり」の姿である「ごみ」が、実は次の価値を生み出す出発点であることに気づいてもらう。そのために、Plantエリアの展示は、来館者が「ごみ」からはじまる「循環」の物語を、ひとつずつ辿りながら体験できるように設計。ごみが微生物の力によって分解され、エネルギーとなり、新たな素材となって、さらにプロダクトへとつながる流れを視覚的かつ体感的な学びへとつなげました。来館者の97%がごみの再利用のために、より意識的に分別しようと思ったと回答※。Plantエリアは、これからの暮らしにおける資源循環の姿を具体的にイメージできる展示として、大きな役割を果たしました。

※来館者の意識・行動変容評価アンケートの回答者402名より算出





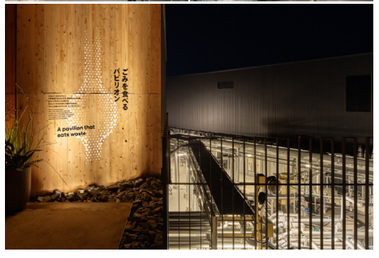
© 2026 MEDICOM TOY

ごみの捨て方に対する意識を変えた〈バイオガスプラント〉

気づく　実感する

日本館の特徴のひとつであり、過去の万博を振り返っても画期的ともいえる取り組みとして、実際に稼働するリアルなプラント設備をパビリオンに併設した点が挙げられます。ごみは「おわり」ではなく、資源のはじまりであることを実感してもらうために、日本館のバイオガスプラントでは、万博会場内で回収した生ごみを受け入れ、エネルギーや水として再生し、館内の電力や展示物として活用しました。また、副産物のCO_2も大阪ガスと連携したメタネーション実証実験へ提供することで、再生資源の可能性も示しました。来館者の96%が生ごみを再利用する取り組みは今後さらに広がっていくと感じたと回答し※、95%が今後バイオガスをはじめとする再生可能エネルギーを使いたいと回答※。「ちゃんと分別せなあかんな（30代）」「捨てるときの意識が変わった（30代）」など、分別や再生資源への意識の変化を示す声も。「ごみを捨てる」から「ごみを循環させる」へと意識を転換するきっかけとなりました。

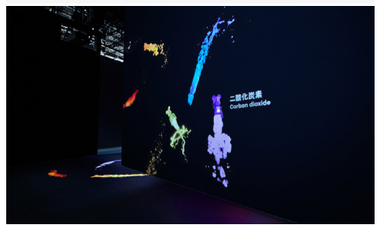
※来館者の意識・行動変容評価アンケートの回答者402名より算出



「循環」するエネルギーを楽しく伝える〈BE@RBRICK〉

気づく

日本館ではバイオガスプラントによって、生ごみを水・熱・電気・CO_2・養分へと生まれ変わらせています。その生まれ変わりを親しみを持って理解してもらうために、色とりどりのかわいらしい〈BE@RBRICK〉たちでポップに表現しました。5つの要素に生まれ変わった喜びやその生命力を、イナズマのように光ったり、水滴のように流れたり、楽しく演出。来館者を展示の世界へ引き込み、循環の仕組みを直感的に感じられる体験へ。さらに、日本館公式グッズ（Tシャツ・エコバッグ・フィギュアなど）として展開することで、自宅などに「循環」を持ち帰る体験へとつなげました。



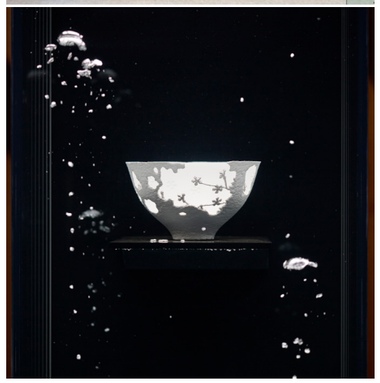
© 2026 MEDICOM TOY

散りゆく美しさを〈生分解性プラスチック〉の器で表現

気づく　実感する

移ろいゆくものに美しさやいとおしさを感じる、日本特有の美意識。その価値観を、〈生分解性プラスチック〉の器が徐々に分解されていくプロセスを通して、目に見える形で表現しました。時間とともに形を失っていく「はかなさ」を体感することで、「おわり」を前向きに捉える新たな価値を来館者に提示しました。「順に分解されていく姿に、思わず心が奪われた（30代）」「こんな技術があるとは知らなかった（50代）」といった声が寄せられ、従来のプラスチックに対するイメージも見直す体験に。来館者の98.2%が日本の美意識を感じたと回答し、98%が日常でも生分解性プラスチックを使いたいと回答するなど※、「おわり」の中にある日本的な美意識に気づくとともに、未来につながる技術への関心も高まりました。

※来館者の意識・行動変容評価アンケートの回答者402名より算出



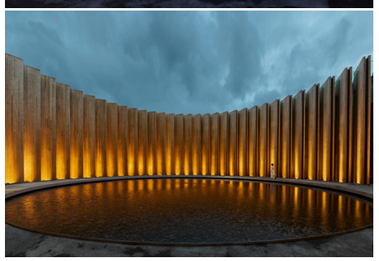
再生の象徴となった〈水盤〉

気づく　実感する

ごみは恵みの源である。太陽と風にきらめく水面の美しさから、ごみを再生する価値を実感してもらうために、日本館の中心には〈水盤〉を展示しました。実際に、万博会場内で回収された生ごみを受け入れ、日本館で生ごみから純水に近いレベルまで浄化された水が静かに循環するこの水盤は、「ごみの先にある新たなはじまり」を体感できる場所となり、水盤の清らかな流れに来館者の多くが足を止めました。日本館が示す「循環」の本質を象徴する存在として、多くの来館者の心に強い印象を残しました。

来館者の声

●飲めるのかなと思うほど、きれいだった（80代）　●このきれいな水が、ごみから生まれたということに驚いた（40代）　●ごみって汚いものだと思っていたから、こんなきれいな水に生まれ変わることにびっくりした（10代）　●万博内から集めたごみが、姿を変えてここに集まっているというのが面白かった（40代）　●水盤を前にしたとき、本当に美しいなと感じた（40代）　●夕方から夜にかけての時間帯は、神秘的に見えた（20代）



ツアー、イベント、その後の広がり

再生の現場に潜入〈バイオガスプラントツアー〉

実感する　行動する

生ごみをエネルギーへと再生する技術や課題、可能性を立体的に理解してもらうために、設計者によるガイド付きの〈日本館 バイオガスプラントツアー〉を全62回開催しました。日本館の展示の根幹にあるバイオガスプラントは、普段、一般公開していない施設。本物の現場を見学することで、自分が捨てたかもしれない生ごみが、目の前で循環しているという実感を高めることにつなげました。閉幕までに個別見学者含め合計2,145名が見学し、ツアー参加者の96%がメタン発酵やバイオガス発電について興味が高まったと回答※。私たちの生活の延長線上に「循環」があることに気づき、生ごみを資源として捉え直す行動へとつながる、貴重な学びの場となりました。

※バイオガスプラントツアー参加者アンケートの回答者265名より算出

参加者の声

●すべてはごみを捨てる人間の行動次第。分別をきちんとしたい（40代）　●ごみと呼ぶべきか資源と呼ぶべきなのか、考えさせられた（30代）　●ツアー後に日本館を観覧したら、展示の演出について理解が深まった（30代）　●微生物を活用するというか、共生していくことが大切だと思った（40代）　●バイオガスプラントのような取り組みがもっと広がるために、みんなの意識が高まることを期待したい（60代）　●今後は細かい部分まで分別しようと意識が変わった（30代）　●万博内で出たごみを回収した後に、手作業で分別していることに驚いた（40代）

SECTION 03

微生物の力を実感する

Farmエリアの展示を中心に、目に見えない「微生物」が、私たちの身近な暮らしや社会を支えると同時に、未来を切り拓く存在であることを提示しました。視覚的に理解できる展示から、感覚に訴えかける体験まで、微生物の力を実感できる多彩な施策を展開しました。

〈日本館体験を通じて目指した変化〉

気づく

微生物を「身近」に感じる

- 身の回りに多種多様な微生物が存在することを知る
- 微生物が、私たちの暮らしや環境にどのように関わっているかを知る

実感する

微生物の「可能性」を目の当たりにする

- 微生物の力で生み出される製品や技術の価値を理解する
- 微生物や藻類が持つ未来の可能性を体感し、持続可能な社会への関わり方を考える

行動する

微生物の力と「社会を動かす」

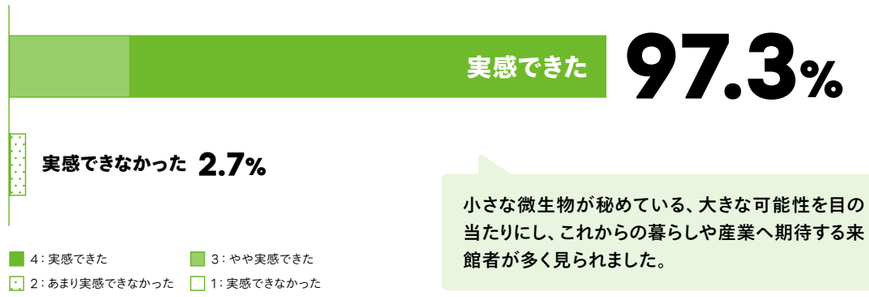
- 微生物や藻類の力を活かした製品を日常に取り入れる
- 自分の行動や学びを他者と共有し、微生物の力を活かす知恵を広げる

微生物の力を活用した、おみやげの配布数

631,433点 ※1

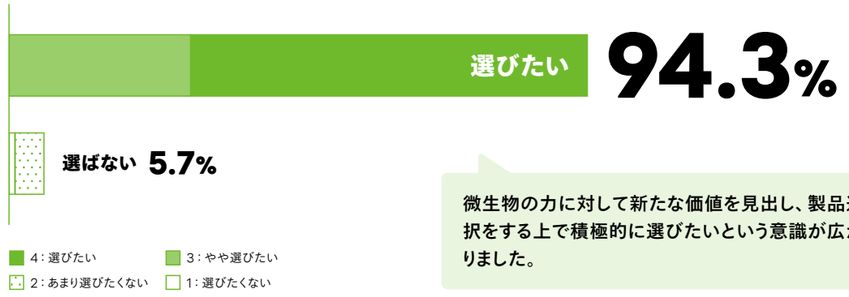
普段、あまり意識することがなかった微生物の力を活かしたおみやげを持ち帰ってもらうことで、より身近に感じてもらいました。

Q. ボツリオコッカスなどの微細藻類をはじめとする、微生物の可能性を実感できましたか？※2



小さな微生物が秘めている、大きな可能性を目の当たりにし、これからの暮らしや産業へ期待する来館者が多く見られました。

Q. 微生物由来の環境にやさしい製品や、微生物の力を活用した製品を選びたいと思いますか？※2



微生物の力に対して新たな価値を見出し、製品選択をする上で積極的に選びたいという意識が広がりました。

※1 生分解性クリアファイル（82,504枚）とスピルリナが配合された藻類みそ汁（548,929個）の配布合計数 ※2 日本館の来館者402名に対して行った意識・行動変容アンケートを集計。最高評価の「4」から、最低評価の「1」を等分し、その中で最も当てはまるものを選択する回答方式。数値は小数第二位以下を四捨五入して表記しているため、合計が100%とならない場合があります

Web、SNS、予習コンテンツ

最も近くにいるいのち〈微生物〉

気づく

身近にいるけれど目に見えない〈微生物〉に光を当て、彼らが持つ力に気づいてもらうために、月刊日本館で微生物をテーマにした特集を組みました。大阪・関西万博「いのち動的平衡館」のプロデューサーでもある生物学者・福岡伸一さんによる寄稿「生命は、地球は、我々は、微生物を起点にめぐっている」をはじめ、1kgもいるという腸内細菌の働きにスポットを当てた記事や、微生物を都市のインフラとして捉えた記事など、驚きや発見に満ちた記事を多数掲載。微生物が循環の中で果たす役割や人との共生関係を掘り下げました。これらの記事を通して、読者に最も近くにいる微生物の働きに気づくきっかけを届けました。

展示、体験

目に見えない微生物が示す〈未来の可能性〉を展示

気づく　実感する

微生物を感じ、理解し、その可能性に気づく。そのために、日本館では微生物の力を伝えるさまざまな展示を行いました。Plantエリアでは、微生物の「分解する力」を、いのちが躍動する壮大な光の草原や、移ろいゆく美しい桜の彫刻として表現。Farmエリアでは、微生物の一部である微細藻類の「生み出す力」を、いのちがきらめく見えない水族館や、フォトバイオリアクターという培養装置を用いた幻想的な空間として表現。微生物に関する多彩な展示を通じて、来館者は小さないのちが持っている大きな可能性に触れ、未来を作る存在としての実感を高めました。

藻類への関心の扉を開く〈藻類×ハローキティ〉

気づく

多種多様な藻類の魅力に気づいてもらうため、世界中で大人気のキャラクター〈ハローキティ〉とコラボレーション。藻類にハローキティのかわいさが融合した愛らしいフォルムが入口となり、多くの人の興味を引きつけました。展示の前では多くの来館者が足を止め、個性豊かな特徴を紹介した解説パネルを読んだり、写真を撮影したり。来館者の98%が藻類の多種多様な形や特性に驚きや発見を感じたと回答※。日本館公式「X」では投稿記事が約107万閲覧数を記録し、「SNSで何度も見ていたキティちゃんに釘付けになった」といった投稿も。月刊日本館の「藻類×ハローキティ図鑑」の記事は137,175PV（2025年10月末時点）と高い注目を集めるなど、ネガティブなイメージを持たれがちな藻類に対するイメージを変え、その多彩な魅力を身近に感じるきっかけを届けました。

※来館者の意識・行動変容評価アンケートの回答者402名より算出

著作 株式会社サンリオ © 2026 SANRIO CO., LTD

日本の発酵文化の主役〈麹菌〉を美しいアートに

気づく

日本に深く根づく発酵文化を支える中心的な存在〈麹菌（こうじきん）〉。〈日本が誇る隠れた料理人、その名も麹菌〉の展示では、その目に見えない麹菌の働きや多様性に目を向けてもらえるように、味に関する遺伝的特性を線香花火をモチーフとした繊細なオブジェで表現。さらに月刊日本館3号「おいしさの小さな原動力」では、日本の発酵文化が受け継いできた知恵に焦点を当て、日本食のおいしさと発酵の関わりを深く掘り下げました。こうした取り組みにより、来館者の96%が日本食のおいしさに微生物が役立っているとあらためて気づいたと回答※。「麹菌を取り入れた食事を意識し、子どもたちにも伝えている（50代）」といった声も寄せられるなど、発酵文化を未来へつなぐ意識の醸成につなげました。

※来館者の意識・行動変容評価アンケートの回答者402名より算出

多くの来館者が驚いた〈藻類の潜在能力〉

気づく　実感する

藻類の持つ驚くべき可能性を伝えるため、資源の生産効率やCO_2吸収量などをほかの植物や食品と比較。具体的な数字を示すことで、そのポテンシャルを直感的に理解できる構成としました。さらに、日本の企業が中心となって手掛けた、藻類を活かした未来の製品も紹介。目に見えない藻類の力を目の当たりにすることができる数々の展示は、多くの来館者の関心を集め、藻類が未来の資源として大きな可能性を秘めていることを発信しました。

来館者の声

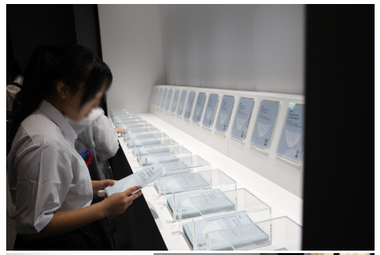
●ただの雑草じゃないんだと勉強になった（10代）　●すごく可能性を秘めている。そこにフォーカスしたのが、面白かった（40代）　●具体的な数字が出ていて、理解しやすかった（10代）　●栄養バランスにも優れているなんて驚きだった（30代）　●藻類を活かした産業の可能性に、期待が大きく膨らんだ（70代）　●藻類の可能性は幅広いんだと知ることができた（30代）　●藻類に対するイメージが覆された（10代）

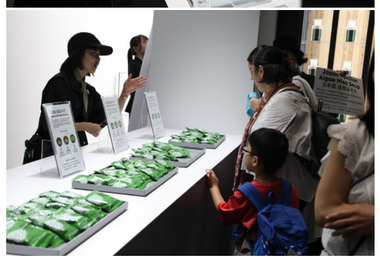
微生物の力をおみやげとして〈生分解性クリアファイル〉〈スピルリナ配合の藻類みそ汁〉を配布

気づく

微生物から生まれる素材の可能性を手にとって体感してもらうために、微生物の力をおみやげとして用意しました。会期前半には微生物の力で分解される器と同じ素材の「カネカ生分解性バイオポリマー Green Planet®」を使用した〈生分解性クリアファイル〉を82,504枚、会期後半にはフォトバイオリアクターで育てている藻類と同じ「スピルリナ」を配合したフリーズドライの〈藻類みそ汁〉を548,929個配布。合計631,433点を来館者の手に届けました。また、配布場所から次の展示へ向かう壁面には、“これであなたも、「循環」の一部ですね”というメッセージを置くことで、おみやげと合わせて言葉でも循環への意識をより高めました。来館者の98%が藻類やバイオプラスチックといった循環素材を用いたものづくりに関心を持ったと回答し、94%が食べることも循環の一部であることに気づいたと回答するなど※、微生物の力をより身近に感じられる取り組みとなりました。

※：来館者の意識・行動変容評価アンケートの回答者402名より算出



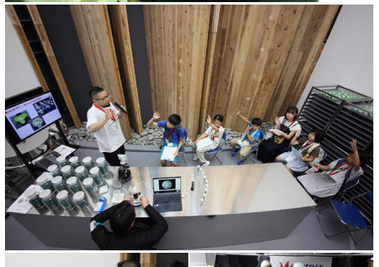


Farmエリアの裏側を大公開〈藻っと知りたい藻類のひみつ〉

気づく　実感する

日本館で展示する藻類を実際に培養しているバックヤードの見学や、顕微鏡による微細藻類の観察など、体験を起点とした小中学生向け夏休み自由研究イベント〈藻っと知りたい藻類のひみつ～日本館で自由研究～〉を開催しました。次世代を担う子どもたちの興味を引きつけるために、藻類の魅力や可能性についてクイズ形式で解説したり、実は藻類が身近な製品に活用されていることを紹介したり。株式会社ちとせ研究所の協力を得ながら、藻類をもっと身近に感じられる内容に。全12回実施し、延べ190名（こども99名）が参加。満足度は10点満点中平均9.5点※と高評価を記録し、藻類の世界から多くの気づきや発見を持ち帰ってもらいました。

※参加者190名のアンケート結果より算出



参加者の声

●子どもの目がキラキラしていた　●見るだけでは理解できないことも体験することで、一生忘れないものとなった　●いろいろな特徴のある藻類がいるということに驚いた　●藻は良くないものだと思っていたので、とても勉強になった　●近い将来、実用化されるかもしれないという藻類の可能性について、子どもと一緒に学べて良かった

小中学生を中心に、生分解性プラスチックについて学ぶイベントを主催

実感する　行動する

次世代を担うジュニア世代をはじめ、合計670名が参加し、微生物の働きによって生み出された素材を通じて、彼らの力を実際に体験するイベント〈「循環」の輪をつなぐ生分解性プラスチックについて学ぼう〉を開催しました。株式会社カネカの協力のもと、微生物を活用したバイオものづくり技術を紹介。実際に展示物の生分解性プラスチックの一部は、CO_2を原料に生分解性バイオポリマーへと変換する微生物「水素酸化細菌」の働きによって生み出されており、海水中でも分解される特性から、海洋プラスチック問題の解決策となり得るなど、微生物が循環型社会の実現を支える一役を担っていくことも伝えました。小中学生は、生分解性プラスチック製ストローを使ったヒコーキ作りも行い、楽しみながら学べる場となりました。

参加者の声

●普段からお肉や魚、牛乳パックの分別回収をしているが、もっとできることを子どもと考えたい　●自然からできて、自然に戻るという循環で、少しでも自然を大切にできたらいいなと思った　●環境問題の原因のひとつであるCO_2も、生分解性プラスチックの原料にすることで循環できることを学べた　●人間がすることは人間に還ってくるのだとあらためて気づかされた

SECTION 04

ものづくりの発想を広げる

Factoryエリアの展示を中心に「やわらかなものづくり」という発想に触れながら、これからの社会に求められる循環型ものづくりのあり方を考え、さらに行動へとつなげることを目指しました。そのために、さまざまな視点や体験を通して、ものづくりの発想を広げる施策を展開しました。

「やわらかい」とは

日本館では、こわれても簡単に直せたり、力をしなやかに受け止めたり、わざと一部がこわれて大切な部分を守ったりすることを「やわらかい」と表現し、そういった発想から生まれた技術の展示を行っていました。

〈日本館体験を通じて目指した変化〉

気づく

日本のものづくりの「やわらかさ」を知る

- 修理や再生、更新を前提とした日本のものづくりには「やわらかい」知恵が息づいていることを知る
- 文化や歴史の中で育まれてきた価値観が、これからの循環型社会のヒントになることを学ぶ

実感する

やわらかなものづくりを「当たり前」に捉える

- 再利用を見据えた設計から、長く無駄なく使える発想の価値を体感する
- 製品だけでなく、社会全体で循環させていく仕組みの重要性を理解する

行動する

次を見据えて「アクション」する

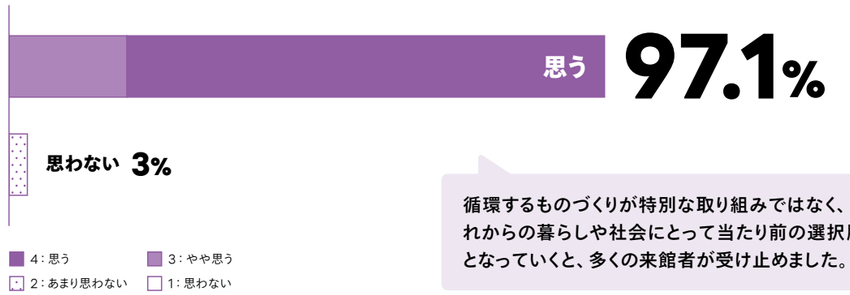
- 修理や再利用などを前提とした、循環を意識して作られたものを積極的に選択する
- 自分の行動や学びを他者と共有し、ものづくりの発想を広げる

日本館が実践した「やわらかなものづくり」

14,989点 ※1

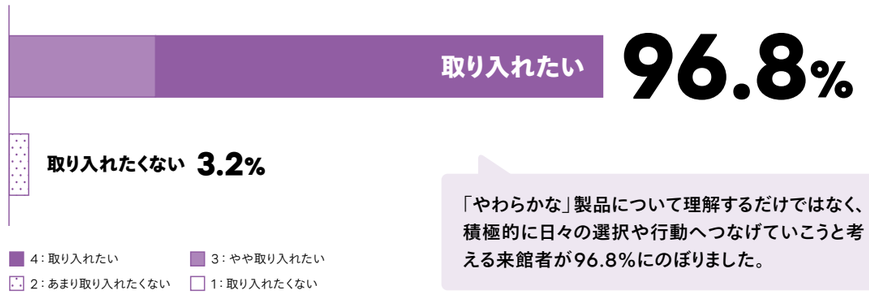
「やわらかなものづくり」とは何か、展示で伝えるだけでなく、来館者が実際に触れたり感じたりできるように実践しました。

Q. 「修理しやすい」「リサイクルしやすい」など循環する製品が、もっと社会全体に広がると良いと思いましたか？ ※2



循環するものづくりが特別な取り組みではなく、これからの暮らしや社会にとって当たり前の選択肢となっていくと、多くの来館者が受け止めました。

Q. 修理やリサイクルしやすい製品を、積極的に暮らしに取り入れたいですか？ ※2



「やわらかな」製品について理解するだけではなく、積極的に日々の選択や行動へつなげていこうと考える来館者が96.8%にのぼりました。

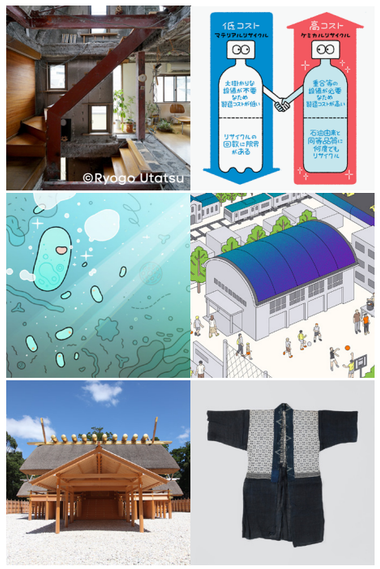
※1 CLTパネル（560枚）、CLTベンチ（16台）、藻類スツール（64台）、アテンダントユニフォーム（7,677点：ジャケット、カットソー、パンツ、ベスト2種、スカーフ、風呂敷の合計点数）、該当する公式グッズパッケージの販売数（6,672個）の合計数 ※2 日本館の来館者402名に対して行った意識・行動変容アンケートを集計。最高評価の「4」から、最低評価の「1」を等分し、その中で最も当てはまるものを選択する回答方式。数値は小数第二位以下を四捨五入して表記しているため、合計が100%とならない場合があります

Web、SNS、予習コンテンツ

ものづくりのあたらしい視点を発信した〈月刊日本館9・10・11号〉

気づく

「循環」をテーマにした日本のものづくりを起点に、3号連続で未来のものづくりを多角的に捉えてもらうための新たな視点を特集しました。9号では、「生まれ変わる力」と題して再利用を前提とした設計思想を紹介。10号では、エネルギーや産業の仕組みを、より持続可能な形へと変えていく「グリーントランスフォーメーション」について「それいけ、みんなのGX」と題し、親しみやすく解説。11号では、日本に古くから伝わる「やわらかく作る」という精神性に光を当て、技術や素材との向き合い方を掘り下げました。身近な暮らしからはじまり、受け継いできた知恵と技術、未来へ続いていく持続可能なアイデアなど、幅広い視点から循環を捉え、ものづくりを新たに見つめ直す視点を読者に提示しました。

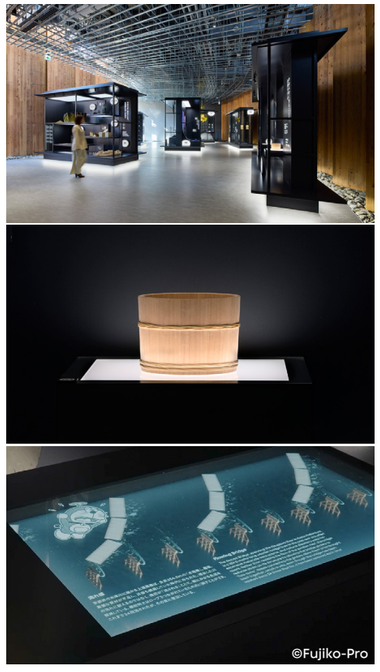


展示、体験

〈ドラえもん〉がものづくりの多様な「やわらかさ」をナビゲート

気づく

日本が受け継いできた「やわらかなものづくり」への理解を深めるために、Factoryエリアでは〈ドラえもん〉が分かりやすくナビゲートする「やわらかなギャラリー」で、その魅力を多角的に紹介。修理や再生を前提とした木桶や、わざと一部がこわれることで大切な部分を守る流れ橋など、多様な視点から循環するものづくりを展示しました。来館者からは「ものづくりは堅牢(けんろう)に作ることが当たり前だと思っていたので、ハッとした(30代)」「日本の文化や技術は世界に誇れるものだと気づいた(20代)」など、固定観念にとらわれないやわらかな創造性が多くの共感を呼ぶ結果に。「やわらかなものづくり」の精神を体感することで、循環するものづくりへの理解と関心を高めました。



歴史・文化背景から丁寧に解説した〈式年遷宮〉

気づく

日本に古来から根づく「循環」と「再生」の価値観について理解を深めるために、社殿などを定期的に建て替えるという営み〈式年遷宮〉を紹介しました。常にみずみずしい状態を保つ「常若」の精神や、技術の伝承といった背景を丁寧に解説。また、月刊日本館11号でも「伊勢神宮に受け継がれてきた、古くてあたらしいサステナビリティの精神」として取り上げ、〈式年遷宮〉に根づく日本の精神面から循環型社会を築くヒントを探る特集を展開。来館者の98.5%が、日本古来の知恵は現代のサステナブルな考え方につながっていると感じたと回答しました※。日本の文化や価値観そのものが、未来へ続くサステナブルな思想であることに気づくきっかけとなりました。

※来館者の意識・行動変容評価アンケートの回答者402名より算出

来館者が実際に触れて感じられる〈やわらかいものづくり〉を実践

実感する

実際に、循環型のものづくりに触れることができる体験要素を取り入れました。日本館で展示しているロボットアームによって3Dプリントされたスツールは、日本館の3つのエリアをイメージした3つの座面で構成され、使い終わったら解体しやすいように設計されています。完成したスツールは館内に設置。多くの来館者が実際に足を止めて腰を下ろし、「分解できるデザインが面白い(40代)」「デザイン的にあたらしくて、売っていたらほしい(30代)」といった声も寄せられました。また、公式グッズのフィギュアのパッケージには、手軽にコンパクトに畳めて捨てやすくした段ボールを採用するなど、「やわらかなものづくり」を意識させる設計に。来館者が触れるものも「やわらかく」作ることで、体験を通じた深い学びを促しました。

次の役目を見据えた〈アテンダントユニフォーム〉

実感する

〈アテンダントユニフォーム〉は、ボタンやファスナーなどの服飾資材をほぼ使わないモノマテリアル（単一素材）を採用。役目を終えたとき、生まれ変わることを見据えて、分別の手間を省く設計によりリサイクルしやすくなっています。さらに環境に配慮しながら、着心地や動きやすさ、暑さ対策といった機能性にも配慮。「日本の美意識を身に纏（まと）う」をテーマに、日本の伝統衣装である着物の構造にも通じる余白の美的感覚を取り入れてデザインされ、年齢や性別を問わず、誰もが快適に着用できるユニフォームとなりました。来館者の95%がこのような循環しやすい服が今後広がってほしいと回答する※など、サステナブルな未来を象徴する装いが、日本館が実践する循環への取り組みをより身近に感じさせ、多くの人へ共感の輪を広げました。また、役目を終えたユニフォームは、フラワーポットに生まれ変わり、教育機関で活用される予定です。

※来館者の意識・行動変容評価アンケートの回答者402名より算出

これから日本中で再利用される、日本館の〈CLT（直交集成板）〉

実感する

日本館は、使用した建築資材を未来へ引き継ぐことで、サステナブルな建築の実践モデルに。建物の内壁材と外壁材に使用した〈CLT〉の一部は、公募で選ばれた全国のパートナー（5自治体・8企業）へ再利用してもらう仕組みを整えました。名誉館長の藤原紀香さんも公式SNSを通じて、循環する建築という新たな思想を分かりやすく発信しました。来館者の92%が日本館の建物全体が「循環」をテーマに設計されていることに気づいたと回答※。「無駄なく使えていて、とても良いこと（50代）」「一貫して循環に取り組んでいることがすごく素敵（30代）」など、取り組みに対する高い評価が寄せられました。さらに、館内のCLTで作られたベンチの一部は、経済産業省をはじめ、関東経済産業局、中部経済産業局、近畿経済産業局にて再利用しています。また、2027年ベオグラード国際博覧会にも展示予定です。

※来館者の意識・行動変容評価アンケートの回答者402名より算出

解体を前提とした建築について、設計者とめぐる〈建築ツアー〉を実施

行動する

いのちの循環を体現した日本館の建築について、より深く理解できるように設計者の解説を聞きながらめぐる〈日本館建築ツアー〉を開催しました。解体後の資材再利用を前提とし、CLTの特徴を活かした設計の工夫など、建物に込められたストーリーを設計者自ら紹介。建てるだけではなく、生まれ変わりまで見据えたものづくりとして捉えてもらうことで、日本館の循環に対する価値観を体感してもらいました。全24回実施し、延べ451名が参加。96%がツアー内容に満足と回答※。日本館の理念への共感を深め、自分自身も次を見据えた行動につながるきっかけを創出しました。

※参加者アンケートに回答した212名の結果より算出

参加者の声

●最初から生まれ変わることを前提に考えられた建築物というのは、これまで聞いたことがなかった（20代）　●溶接部分がほとんどなくて分解しやすいという話が面白かった（50代）　●次のために最大限の注意を払って設計されていることに驚いた（50代）　●循環に合わせて、建物を円にしたというのも素敵（40代）　●内と外につながりを持たせながら、円形にした建築が循環というテーマに沿っていると感じた（40代）　●循環型社会に向けて建築ができることは、もっとあると気づかされた（30代）

〈日本館からつながる「循環」～文化、技術、そして未来へ～〉と題した、サーキュラーエコノミーのトークイベントを開催

行動する

作って、使って、捨てるという従来の生産・消費モデルではなく、サーキュラーエコノミーの実現に向けたものづくりのヒントを紹介するトークイベントを2025年9月23日に開催。展示でも紹介した〈式年遷宮〉の精神性や、新技術を用いた次世代の〈生分解性プラスチック〉、日本館の循環型建築などの取り組みから、ものと向き合う姿勢や資源循環の考え方を共有しました。延べ160名の参加者からは、「サーキュラーエコノミーに対する意識が変わり、実際に自分の生活でも取り組んでみたい」などの声が寄せられました。

※登壇者：京都大学総合博物館 准教授 塩瀬隆之さん、神宮司庁広報室 次長 音羽悟さん、株式会社カネカ CO_2 Innovation Laboratory 所長 佐藤俊輔さん、株式会社日建設計 ダイレクター 高橋秀通さん、内閣府官房審議官（経済財政運営担当）浦上健一朗さん、株式会社ソトコト 編集長 指出一正さん（モデレーター）

参加者の声

●難しいことだと思っていたが、日常でも実践できると気づいた（30代）　●柔軟な思考でものごとを捉えていくことを、身の回りのもので実践していきたい（30代）
●子どもたちが日本館で体験した循環を、成長していく中で思い出してくれたら、未来の技術の発展につながっていくと思った（20代）　●実は生分解性プラスチックのストローがとても身近にあって、すごい技術だなと感じていた（30代）

新たに生まれたつながり

多様な価値観を尊重しながら「いのち輝く未来社会」をともに作り上げていくために、ホスト国のパビリオンとして、国内外のパビリオンと連携したイベントや万博会場外での取り組みにも積極的に参加。多くの人と思いや体験を共有・共創することで、国籍や世代を超えた人々をつなげる役割も果たしました。

日本館で

約170の国・機関
の賓客が来館

日本館は、ホスト国パビリオンとして、万博期間中、世界各国から次々と訪れる賓客の接遇拠点としての役割も果たしました。日本館は、「第二の迎賓館」として、約1.2万名の国内外の賓客を受け入れました。日本館の発した「循環」のメッセージは、日本古来の思想や考え方を海外賓客に直接訴求する機会を提供しただけでなく、日本がリードしている未来社会を形作るテクノロジーと併せ、未来に向けて世界に貢献する日本の姿を力強く印象づけました。

約1,000名
の万博チルドレンと共創

日本館では、次世代を担う若者を「万博チルドレン」と位置づけ、「いのちと、いのちの、あいだに」について学ぶ5つの主催イベントを開催しました。小学生から大学生まで約1,000名が参加し、未来の実践者として自らアクションを起こすきっかけを届けました。

ハイジ
も日本館を訪問

名誉館長 藤原紀香さんがスイスパビリオンのアンバサダー「アルプスの少女ハイジ」とともに日本館内をめぐり、生分解性プラスチックの器、水盤、火星の石などの展示物について解説。日本館のテーマとその根底にある「循環」について伝えました。

ほかパビリオン等と

4,683枚
の願いが集まった七夕イベント

日本館を含む24の国内パビリオンが連動して、日本の七夕文化を世界に発信するイベントが開催されました。日本館では笹と短冊を用意。日本館を訪れた世界各国の人々も参加を呼びかけ、4,683枚の願いが集まりました。

270名
が「赤い糸」に

フランス・ナショナルデーに、日本館とフランス館を赤い糸でつないでいく「赤い糸」イベントに参加。赤い服と帽子を身につけた日本館アテンダントを含む270名の参加者が両館をつなぎました。

ジャパンデー

日本のナショナルデー「ジャパンデー」では、約1,500名を前に日本の文化や魅力を発信。さらに、陸上自衛隊中部方面音楽隊の演奏に合わせて、当日のイベント出演者とともに万博会場内をパレードしました。

EXPOアテンダント×キャラクター
ワールドフェスティバル
でひとつに

大阪府、大阪市、大阪ヘルスケアパビリオンが開催した、「多様でありながら、ひとつ」であることを体現する交流イベントに日本館アテンダントも参加。フィナーレでは、多くのパビリオンのアテンダントやキャラクターとともに大屋根リング下をパレードしました。

会場を離れて

東京
で楽しめる日本館

経済産業省 別館1階の共創空間「ベツイチ」で、2025年7月28日から10月30日まで期間限定でサテライト展示を実施。東京でも日本館の魅力を発信しました。連日多くの方が訪れ、日本館が表現するさまざまな「循環」に触れていただきました。

ツーリズムEXPOジャパン2024
に日本館も参加

2024年9月26日～29日に開催された世界最大級の旅の祭典で、日本館のPRを行いました。延べ182,934名が来場したイベントには国内要人も来訪され、ニュースで報道されるなど日本館への注目も集まりました。

全国各地
へ広がる日本館

日本各地で開催される自治体などの地域イベントに、日本館も協力。会期中に展示したゆかりのあるコンテンツなどが登場する企画も予定しています。日本館が届けてきたさまざまなメッセージは、閉幕後も全国各地へと広がりながら「循環」していきます。

アクセスできるレガシー

大阪・関西万博 日本館を未来へ活かしていくために、会期中に築いた価値を一過性のものにせず「誰もがアクセスできるレガシー」として形に残していきます。建材や什器（じゅうき）、ユニフォームといったものはもちろん、月刊日本館や日本館まるごとガイド、映像などのコンテンツも次世代へ受け継ぎます。

日本館の一部分にアクセス

CLTパネル

日本館の建物で使用していたCLTパネルの一部は、全国各地の計13団体が再利用予定です。

〈再利用パートナー〉
（株）エヌ・シー・エヌ、（株）奥村組、積水ハウス（株）、大東建託（株）、（株）竹中工務店、日本ノボパン工業（株）、西尾レントオール（株）、ライフデザイン・カバヤ（株）、茨城県境町、岡山県真庭市、香川県小豆島町、高知県、和歌山県串本町

CLTベンチ

日本館内で使用していたCLTベンチは、経済産業省、関東経済産業局、中部経済産業局、近畿経済産業局にて再利用しています。また、2027年ベオグラード国際博覧会にても展示予定です。

スツール

藻類とバイオプラスチックを混ぜ合わせた特別な素材で作られたスツールは、2027年に横浜で開催する国際園芸博覧会「GREEN×EXPO 2027」での活用を予定しています。

アテンダントユニフォーム

役目を終えたユニフォームは、フラワーポットに生まれ変わり、教育機関で活用予定です。

日本館の活動にアクセス

2025年国際博覧会 政府出展報告

日本館の理念やテーマ、建築・展示、運営、広報、成果などを一冊に記録しました。経済産業省のWebサイトでデジタル版の公開を予定しています。

経済産業省
※今後掲載予定

日本館アーカイブムービー

日本館の展示を実際に観覧しているかのようなムービーを収録し、経済産業省と日本国際博覧会協会のWebサイトで公開を予定しています。会期中に提供していた音声ガイドと合わせて、日本館を楽しむことができます。

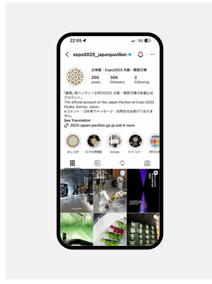
経済産業省
※今後掲載予定

日本国際博覧会協会

日本館Webサイト

日本館のコンセプト紹介やWebマガジン「月刊日本館」、展示の理解促進を図った「日本館まるごとガイド」など公式サイトの一部を、日本国際博覧会協会のWebサイトで公開を予定しています。

日本国際博覧会協会



日本館公式SNS

日本館の情報発信を行っていた公式SNSアカウントは、次期博覧会の日本館へと引き継がれる予定です。大阪・関西万博 日本館の取り組みや様子も引き続きご覧いただけます。

日本館レガシーは
未来へ受け継がれていく

大阪・関西万博のホスト国として日本政府が出展した日本館は、「循環」の価値や多彩さなどをさまざまな形で発信・表現してきました。来館者として日本館を体験した方、企画者として日本館を形成した方、何らかの形で日本館のメッセージに接した方、それぞれがメッセージを咀嚼（そしゃく）し、さまざまな「循環」の中に置かれたひとつの存在として、未来へ向けた新たな気づきに出会えたのではないでしょうか。それらの気づきが共感を呼び、これからも伝播（でんぱ）を続けていくことでしょう。

この日本館レガシーブックでは、日本館が作り上げてきたレガシー（循環型社会の実現などに向けた多様な価値・気づき・行動変容等）を「循環を自分ごと化する」「『おわり』を問い直す」「微生物の力を実感する」「ものづくりの発想を広げる」という4つのセクションに分けて紹介してきました。来館者一人ひとりが、暮らしや社会の中にある「循環」に気づき、考え、行動へとつなげていく。展示体験やイベント参加をきっかけに生まれた小さな気づきは、多くの来館者の中に確かな変化として残っています。

たとえば、「循環」を前提にものごとを捉える視点、当たり前を問い直す姿勢、目に見えない存在に目を向ける感性、新たな価値を生み出す発想。これらは、循環型社会を考える上で大切な考え方です。展示や建築といった目に見えるものだけではなく、万博や日本館に触れた方々の中に芽生えた思考や態度が、日常の中で生き続けていくこと。それらの連なりが、この日本館レガシーブックも一助となって、生まれていくことを願っています。

日本館で生まれた価値観や問いは、次の世代へと受け継がれていきます。日本館は、未来へ向けたバトンの出発点としての役割を果たしました。万博チルドレンをはじめ、これからの社会を担う若い世代が、それぞれの暮らしや学びの場で「循環」を捉え直し、新たな形へと発展させていくことを期待しています。

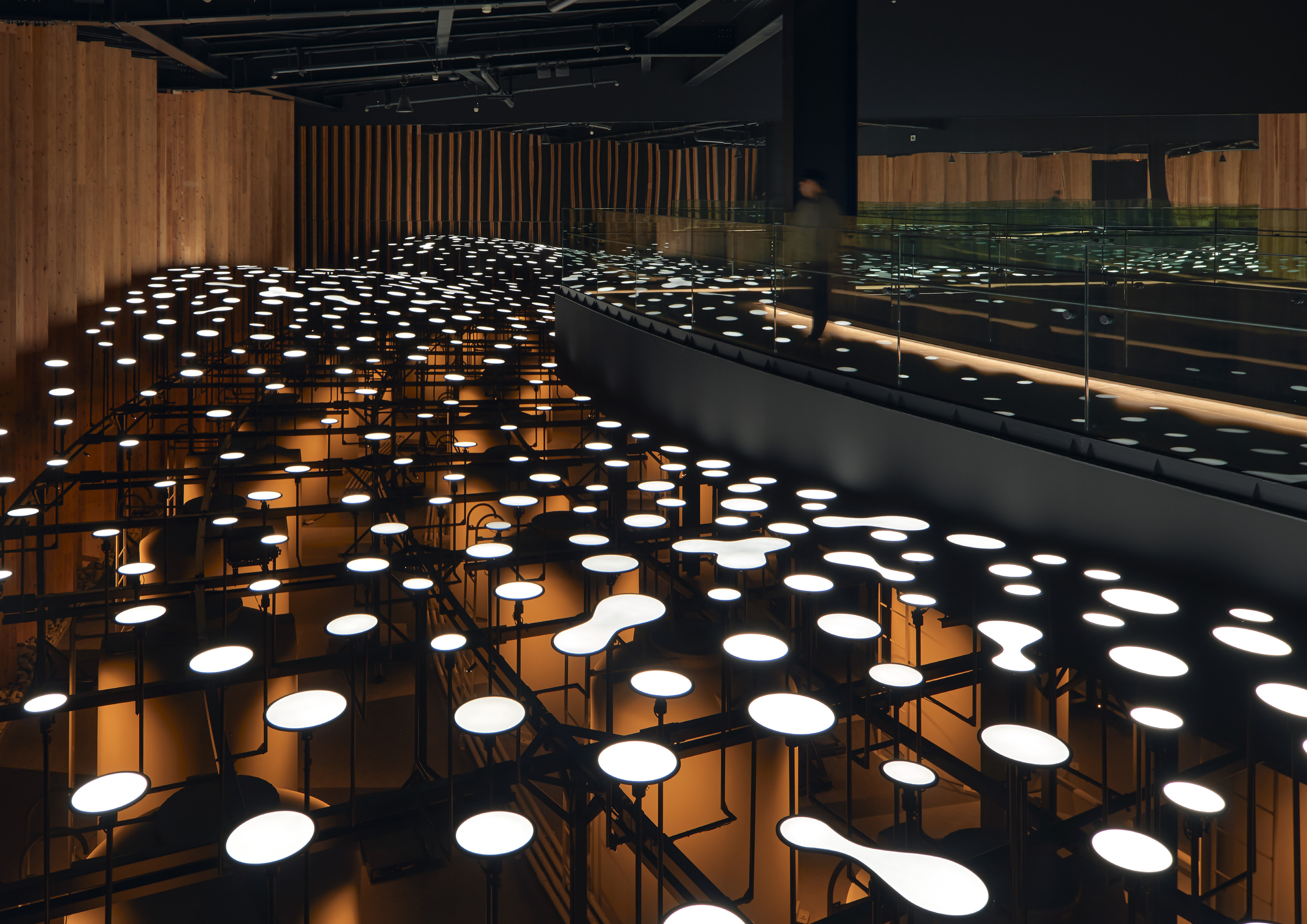
この日本館レガシーブックを手に取ったあなたも、すでに「循環」の一部です。日本館で生まれた気づきや問いを受け取り、自分なりの言葉で誰かに伝え、行動へとつなげていく。これは「おわり」ではなく、「はじまり」。日本館の思いとともに、これからの循環型社会を実現していく当事者として、次の世代へとバトンをつないでいきましょう。

Japan pavilion
Expo 2025

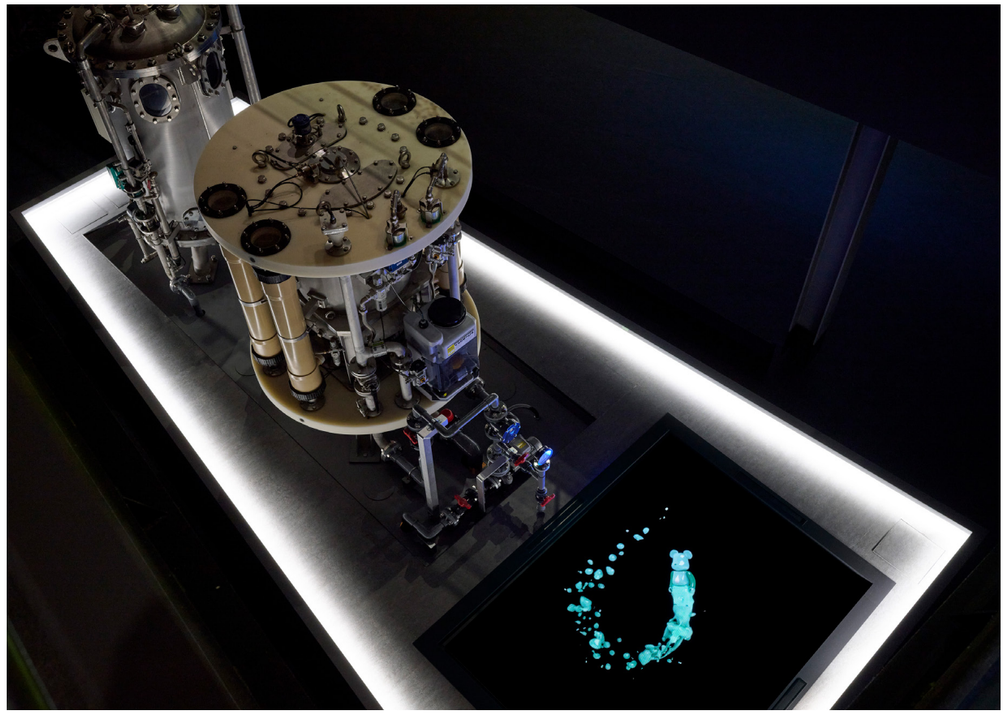
日本館フォトギャラリー
Photo Gallery

Japan
日本館

Japan
日本館



© 2026 MEDICOM TOY



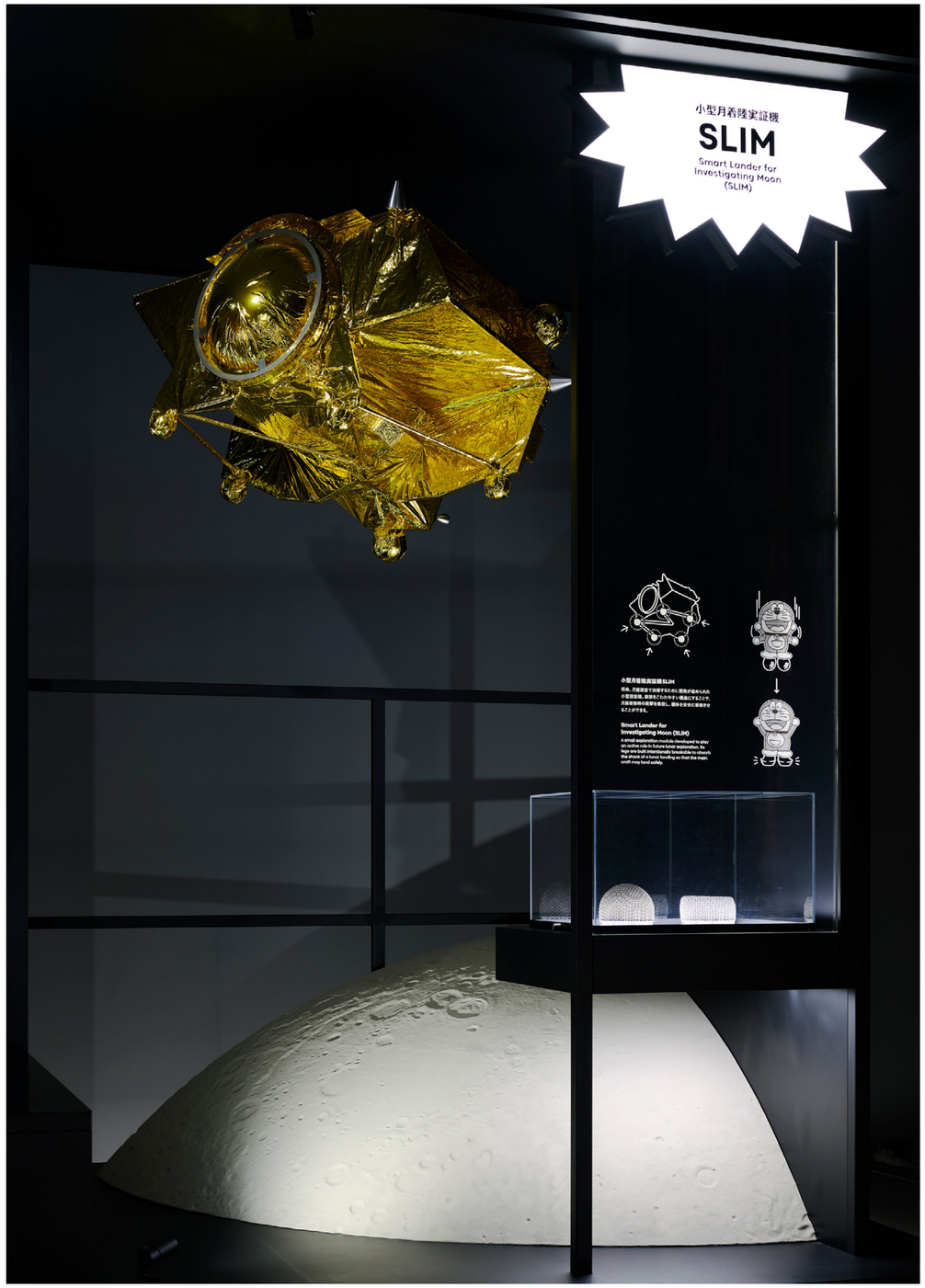
© 2026 MEDICOM TOY

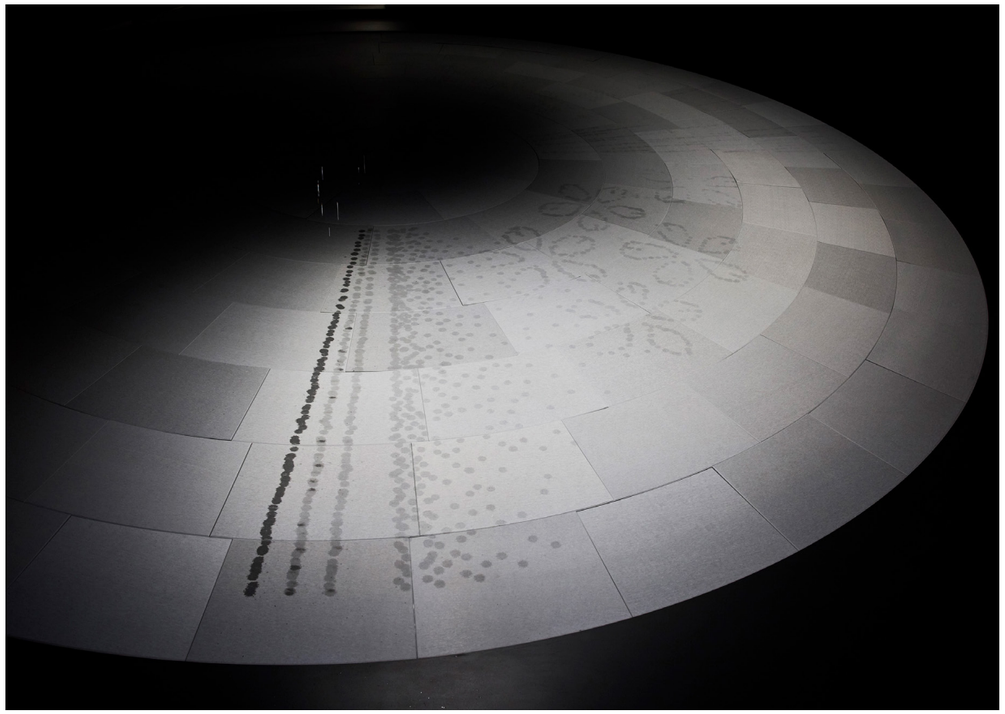
著作 株式会社サンリオ © 2026 SANRIO CO., LTD

著作 株式会社サンリオ © 2026 SANRIO CO., LTD

What shall we make with CO2?
CO2でなにを作ろう？
Japan pavilion

KNOCK
KNOCK
WHIRR WHIRR


小型月着陸実証機
SLIM
Smart Lander for Investigating Moon (SLIM)
小型月着陸実証機SLIM
将来、月面探査で活躍するために開発が進められた小型探査機。機体をこわれやすい構造にすることで、月面着陸時の衝撃を吸収し、機体を安全に着陸させることができる。
Smart Lander for Investigating Moon (SLIM)
A small exploration module developed to play an active role in future lunar exploration. Its legs are built intentionally breakable to absorb the shock of a lunar landing so that the main craft may land safely.



©Fujiko-Pro

Farm
AREA

Japan 日本館

「さよなら」
じゃなく、
「いつかまた」
Not 'goodbye',
but 'see you again'.

Legacy Book

日本館レガシーブック

発行　令和8年2月

企画・発行
経済産業省

企画・編集
公益社団法人2025年日本国際博覧会協会

企画・制作
株式会社日本デザインセンター